

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月12日現在

機関番号：22303

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22560619

研究課題名（和文） 高齢期におけるリロケーション後の環境行動支援

研究課題名（英文） Support of Environment Behavior after Relocation during Old Age

研究代表者

古賀 紀江 (KOGA TOSHIE)

前橋工科大学・工学部・准教授

研究者番号：10295454

研究成果の概要（和文）：本研究は、自立して日常を送ることのできる高齢者が居住場所を移した場合、転居後も健康で充実した生活を送るための環境に関して知見を得ることを目的とした。転居の結果として思い通りの環境が得られたかどうかは単に家具物品類の引っ越しの成功だけではなく対人環境等の構築や持続が意味を持つことが示唆された。これに基づき、地域コミュニティに関する検討、「もの環境」と居室の印象評価の関係について考察を行い、高齢期リロケーションに伴う環境行動支援に関して一定の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：This study sought to obtain knowledge about the environment so the elderly who can live independently can lead healthy and fulfilling lives after moving to new places of residence.

The results we obtained suggest that whether or not an environment as expected is obtained as a result of the move depends on not just successfully moving furniture and household items. Creating and maintaining an interpersonal environment also play a role. Based on this finding, we studied the local community, and discussed the relationship between a “physical environment” and one’s impression and evaluation of his or her room. We also obtained some results on the support of environmental behavior involved in relocation during old age.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：建築計画

科研費の分科・細目：基盤研究（C）

キーワード：リロケーション、高齢者、リロケーションストレスシンドローム、もの、場所愛着、環境行動支援

1. 研究開始当初の背景

居住場所の移動については、移住後、新しい環境世界の再構築がうまくいかない場合、心身に悪い影響が出るということが、既に1960年代には Aleksandrowicz(1961)らによって言及されている^{文1}。いわゆるその後のリロケーションストレスシンドローム(RSS)研究に繋がっていくものの先駆であるが、RSSに関しては「老人ホーム等の施設への」、「受

動的な」移動に起因するものについての研究が多くを占めており、主に精神的な状態に着目している。例えば Bekhet 等(2007)^{文2}は、リロケーションストレスについて人側の要因を明らかにしている。一方、大原(1992)等^{文3}は、居住場所移動のもたらす影響について、移動前後の行動や環境要素の変化によって当事者が受ける影響の特徴が表せることを示している。また、外山(1987)^{文4}は、スウェ

ーデンの事例で虚弱高齢者が自宅から老人用アパートなどに移り住む前後について、それぞれのフェーズにおける物理的環境、社会的環境との関わりを通して論じている。以上の結果から、いかにして危機的移行を防ぐかの知見が提示されている。しかしこれらは、高齢社会化へ加速が増していく時期の研究であるため（特に、大原と外山）、ある一定の身体的理由を持って入居（移住）を選ぶ人々、つまり日常に自立困難をきたしている人々を対象としている。これに対して本研究は、自立した生活が可能な健康な人々を考察の対象とする。高齢者居住施設入居を対象とした研究は、申請者も含めてこれまで多くの蓄積があるが、一般住宅への転居移動をサポートするという観点の研究蓄積はきわめて少ない。転居は大きなストレス要因であり、高齢期にあっては注意を要するイベントである。自立して生活する高齢者が次の住まいでも健康で地域活動ができるための支援は、高齢社会における地域社会の持続的発展にもつながるものである。

2. 研究の目的

本研究は、自立して日常を送ることのできる高齢者が居住場所を移した場合、転居後も健康で充実した生活を送るための環境に関して知見を得ることを目的とする。長寿・高齢社会という背景のもと、高齢期における居住場所移動は増加する傾向にある。研究では、多大なストレスの原因となる転居によって、健康や活動意欲をそがれず、QOLを維持、向上できる環境移行のあり方について考察する。

また、リロケーション後の生活再建には社会的関係の構築が必要とされている。研究では、地域コミュニティの特徴について、地域間比較により考察を加え、RSS 乗り越えのための示唆を得ることとする。

本研究の知見を、心理学や精神医学の専門家でなくても可能な、リロケーションストレスの診断方法へと展開するための基礎へと展開につなげたい。

3. 研究の方法

研究では、特に高齢期における居住場所移動に伴う、(a)旧住宅から新居へのものの取捨選択と移動、(b)地域コミュニティへの関わりの中の二つの局面に着目し調査分析を行うこととする。(a)、(b)における具体的な調査内容と方法を以下に記す。

(1) 「(a)新居への転居の際のものの取捨選択と移動」の局面で明らかにすること。

①「引っ越し」の成功、あるいは不成功の評価と引っ越し前後の対人環境、引っ越し時の「もの」の取捨選択、プレイスアタッチメントの関係について、アンケート調査を通して

明らかにする。②引っ越し後の「もの」環境整備にあたり、居室の印象を良くする手法の可能性について検討する。客観的な考察から着手すべく、高齢者居住施設の個室を対象とした印象評価実験を行う。評価実験は印刷された居室写真をもとに被験者が個別に行う。

(2) 「(b)地域コミュニティとの関わり」局面で明らかにすること。

①転居前後の対人関係や活動への参加の状況と転居後の主観的評価との関係についてアンケート調査により明らかにする。②地域コミュニティとの関わり方と地域が持つ特徴との関係について知見を得るためにアンケート調査を実施、分析する。

4. 研究成果

(1) 転居経験に影響を与える環境要素

①研究の方法

「高齢期の引っ越し」はその後の生活にどのような影響をもたらしているかを明らかにするためにア)転居前後の地域、生活環境、イ)転居後の住まい、地域環境の満足感、ウ)転居の際の家具物品の移動に関する主観的評価等についてアンケート調査を行った。

表1-1 調査対象者男女別年齢構成

年齢階層	男性	女性	合計	割合
～60歳	0	2	2	2.00%
65～70歳	1	2	3	2.90%
71～75歳	4	4	8	7.80%
76～80歳	12	15	27	26.50%
81～85歳	17	23	40	39.20%
86～90歳	8	9	17	16.70%
91歳～	2	3	5	4.90%
合計	44	58	102	100.00%

対象者は首都圏に2000年代初頭に建設された2つの高齢者専用住宅の居住者の協力を得た。これらは共に同じ団体が所有する高齢者のための設計的配慮とサポートシステムを持つ住宅である。調査概要を以下に記す。

調査時期：2011年3月 調査住宅：高齢者専用集合住宅 A 千葉、及び B 神奈川 調査協力者：A 住宅入居者 44 名中 28 名（回答率 63.6%）、B 住宅入居者 140 名中 78 名（回答率 55.7%） 回収方法：全戸配布後協力者には管理人室カウンターに設置したポストへの投函を依頼するという方法を取った。

②結果と分析

i) 回答者像 回答者の年齢構成は表1-1の通りである。80歳～85歳代が最も多い。平均居住年数は約9.4年である。前住地は、住宅のある県内が約49%、首都圏内が37%で、距離的、地域的に近い所からの入居が多い。また、前住居の形式は、一戸建て、集合住宅共にほぼ5割を占め、前住居居住年数は戸建の方が長い。

ii) 引越しの理由 a.ケア環境が整っていたから(56.9%)、b.交通の便(51.0%)、c.バリアフリー設備が十分だったから(47.1%)、が順に高回答率だった(複数回答)。県内、近県からの入居がほぼ9割を占めているものの、「子どもの住まいがあったから」(21.6%)、「もとの

家から近い」(6.9%)の結果から、転居先と旧宅や子供宅との距離が至近であることは、特に求められていなかったと推測できる。

iii) 転居後の状況 入居者自身の状況 ㊲現在の健康度「不安はない」20.8%、「特に持病はないが不安がある」39.6%、「病気がある」は37.8%であった(無回答2名)。現在の健康度と入居後月数の間に相関は認められない(R=0.01)。㊳転居後の体調変化「病気がちになった」(31.1%)、「変わらない」(59.4%)、「健康になった」(5.7%)である。変化度と入居後月数の間にはごく弱い相関が認められる(R=0.30,p<0.05)。㊴新しくできた友人72.6%の人が、新たに友人ができた」と回答した。㊵転居前にしていたサークル等の活動の継続転居後も継続していると答えた人は52名、約50%である。また、活動で一緒だった友人との交流が現在でも続いているかという質問に対しては106名中、75名が回答し、そのうち「時々ある」44%、「頻繁にある」21.3%と言う結果を得た。活動の継続や、そこで知り得た人との交流の継続の傾向について前住地が同一県内と近県の間には差は認められない。(Kruskal Wallis 検定 p<0.05)。

iv) 転居後環境の評価 ㊲概要 a.住まいの満足度、b.転居した地域に対する満足度、c.転居後の生活の落ち着き、に関して5段階の評価を試みた。住まいの満足度、地域への満足度は共に「普通」以上を回答する人が殆どを占めていた。落ち着きに関しても同様の傾向が見られる。a、b、cの評価と入居後の月数の間に相

表1-2 前住居形式と評価

	戸建て	集合住宅
住まいの満足度	4.13	3.70
地域満足度	3.98	3.91
転居後落ち着き	3.88	3.52

関は認められず、長くいることで評価が高くなり、「落ち着いた」気分が増す傾向は認められない。

v) 前住居のスタイルとの関係 前住居形態群間(戸建と集住)で、評価傾向に差があるか検討した。a.住まいの評価、b.転居後の落ち着きに有意差が認められた

表1-3 新しくできた友人の有無と評価平均

	新しくできた友人	
	いる	いない
住まいの満足度	4.13	3.35
地域満足度	4.04	3.68
転居後落ち着き	3.86	3.31

(Mann-Whitney U 検定)。共に前住居が戸建住宅グループで平均点が高い(表1-2)。

vi) 新しくできた友人の有無との関係 上と同様にして転居後にできた友人の有無による群間で評価の差をみたところ、a、b、c全てで評価傾向に有意差が認められた (Mann-Whitney U 検定)。「新たにできた友人がいる」カテゴリーが「新たにできた友人はいない」よりも、全ての項目で平均点が高い(表1-3)。

vii) 「体調」の状況との関係 「健康観」と「体調の変化」の回答群と3つの評価項目の

回答傾向の関係を見た。Bonferroni 法により

3群比較を行ったところ、c.転居後の落ち着きの評価で、健康観では「不安がない」の平均得点が「不安がある」より有意に高く、体調の変化では「変わらない」の平均が「病気がちになった」より有意に高い。

viii) 家具や「もの」の引越しについて ㊲家具、物品の選択理由 持ってくる家具や品物を選ぶ基準について複数回答の質問を行った(表1-4、5)。家具、物品ともに「手放したくないもの」、「使い慣れたもの」、「思い出の

表1-4 家具の選択理由

理由	選択者数	前住居形態別	
		戸建住宅	集合住宅
全て持ち込んだ	5 2.70%	1 1.00%	4 4.70%
手放したくないもの	43 23.50%	25 25.80%	18 20.90%
使い慣れたもの	46 25.10%	19 19.60%	27 31.40%
思い出のあるもの	39 21.30%	22 22.70%	17 19.80%
家族のすすめ	1 0.50%	0 0.00%	1 1.20%
小ぶりなもの	36 19.70%	21 21.60%	15 17.40%
その他	13 7.10%	9 9.30%	4 4.70%
合計	183 100.00%	97 100.00%	86 100.00%

上段: 選択者数、下段: 選択率

表1-5 家具の選択理由

理由	選択者数	前住居形態別	
		戸建住宅	集合住宅
全て持ち込んだ	5 3.50%	0 0.00%	5 6.80%
手放したくないもの	19 13.20%	1 1.40%	18 24.30%
使い慣れたもの	46 31.90%	24 34.30%	22 29.70%
思い出のあるもの	35 24.30%	20 28.60%	15 20.30%
家族のすすめ	16 11.10%	15 21.40%	1 1.40%
小ぶりなもの	9 6.20%	0 0.00%	9 12.20%
その他	14 9.70%	10 14.30%	4 5.40%
合計	144 100.00%	70 100.00%	74 100.00%

上段: 選択者数、下段: 選択率

あるもの」が多くの人に理由としてあげられていた。家具の方が「小ぶりなもの」の選択割合が高い。家具、ものの選択理由を転居前に「戸建」か「集合住宅」かの2群で分けたところ、「もの」の選択理由の分布傾向に2群間で有意差が認められた(χ^2 乗検定)。集合住宅の場合、「全て持ち込んだ」回答者も5名見られた(戸建では0名)。このことは集合住宅からの転居の際の「もの」移行のストレスは戸建よりも低めであることを推測させる。戸建では「家族のすすめ」が15名、集住では1名で、戸建からの転居で家族の関わりが多かった。㊳家具、物品の引越し結果の評価 「もとの住まいから持ち込んだ家具物品への満足」、「思い通りの生活環境が整えられたか」の2点の質問では、双方とも「普通」以上が9割以上を占めた。前住居が戸建かの2群に分けて評価内容を比較したが有意差は認められなかった。つまり今回調査対象の転居場面においては、異なる住宅形式から移った利点も同じ住宅形式から移った利点もないことが示唆された。

③まとめ

転居の結果として思い通りの環境が得られたかどうかは単に家具物品類の引越しの成功だけではなく、転居先での新たな対人関係の構築のような地域との関わりも意味を持つことが示唆された。家具よりも物品類の移動理由に前住居の影響が見られた。今後

精査すべき課題である。

(2) コミュニティとの関わりかたの地域差について — 地域住民による災害時の互助的行動の予測を中心とした考察 —

①研究の背景と目的

持続的な発展が可能な地域、街づくりの重要性について指摘されて久しい。ある地域が未永く人々の豊かな日常生活の場であり続けるためにはそこに住まう人々がその場所に一定の満足を持つことが求められよう。従ってその住まいのある地域を住民としてどのように捉え、実際に行動しているかは、その後の地域の持続性に影響を与えるものと考えられる。また、今日の高齢者の単身世帯の増加傾向は、ある個人が身体虚弱化や生活の利便を理由とした高齢期における居住場所移動を体験する可能性の増大を示唆するものと考えられる。以上の背景のもとに、生活環境の質を考察し、転居後サポートへの知見を得ることを目的とする。

②研究の方法

住民による地域環境評価を得るため、前橋市内の発生の異なる2つの地域でアンケート調査を実施した(2010年11月から12月)。地域Aは、開発後50年近くなる団地、Bは古くから自然に発生してきた住宅地区である。アンケート項目は、a.回答者属性、b.ひとをめぐる環境、c.バリアフリー環境、d.交通環境、e.防犯環境、f.地域への愛着度のカテゴリで構成される。b.からf.は、コミュニティ環境(b)、物理的環境(c、d)、犯罪に対する安心環境(e)、場所愛着評価(f)のグループから成る。本章ではこのうち、「コミュニティ環境」に含まれる、「災害時に声をかける人がいるか」「災害時に声をかけてくれる人がいるか」という、『災害時の互助的行動』に関する2つの評価項目の回答に焦点をあてて分析・考察を行った。

③調査方法及び回答者属性

A地域では、自治会の協力による全戸配布後(約800戸)、回収は自治会内に設置したポストへの回答用紙投函により行った。B地域では対象地区内の公民館の協力により、公民館を利用する活動団体へ調査用紙を配布(1000枚)、団体内での回収とした。各地域での回収率はそれぞれ59%、42%であった。B地域において同地域内居住者はうち267名である。両地域とも女性が7割前後が多い。

④結果と考察

i) 災害時における互助的行動の予測 A地区で「災害時に声をかける相手がいる」と回答した人は約59%、「災害時に声をかけてくれる人がいる」と回答した人は約43.1%で、双方に13ポイント近い差がある。「災害時に声をかけてくれる人はいない、いるかどうかわからない」は50.5%である。

B地区では、「災害時に声をかける相手が

いる」と回答した人は約73.4%、「災害時に声をかけてくれる人がいる」とした人は約69.3%である。災害時の互助的行動の存在を予測できる人の割合がA地区より格段に多い。

ii) 居住年数・年齢階層と災害時互助的行動
a) 災害時声かけ：A、B二つの地域共に居住年数カテゴリによる「災害時の声かけ」回答傾向に有意差は認められなかった(χ^2 乗検定)。その地域に長年住み続けることが、地域に対する評価を大きく変えるものではないことが予測される。一方、世代間の回答状況にA地区で有意な差が認められ、B地区には有意差が認められない。

iii) 災害時他者から自分への声掛け：①両地区ともに、居住年数カテゴリ間での「声をかけてもらえるか」に対する回答傾向に有意な差は認められないが、②年齢階層ごとの回答傾向間には、それぞれの地区内のカテゴリ間で有意な差が認められた(χ^2 乗検定)。

iv) 60歳以上の回答者の回答傾向の分析

以上は、災害時の互助的行動に関する評価は居住年数より世代によることを示唆している。しかし2つの地域の傾向には相違が見られる。両地域の特徴を明らかにするために2つの地域の回答者の主たる部分を占めた60歳代以上の高齢者層について分析を行った。災害時互助的行動：声をかけようと思う相手がいるかどうかに関しては2地域の間には有意差はみとめない。共に、声をかけようと思う人がいるとする回答が多くを占める。声をかけてくれる人がいると思うか、に対する回答傾向は、2地域間で有意な差が認められた。A地域では、「いる」人の割合はB地区より20ポイント以上低い。

v) コミュニティ、防犯等に関する評価：コミュニティ環境、物理的環境、防犯に対する安心感、場所愛着評価の回答結果を比較したところ、14項目中11項目で有意な差が認められた(Mann-Whitney test)。A地区は、コミュニティ環境、物理的環境、防犯環境の得点が高いが、愛着得点平均はB地区の方が高いなどの特徴が示された。

⑤まとめ

災害時の互助的行動は居住年数によって傾向が変わるわけではないことが示唆された。一方で、地域に古くからある集落から発生した住宅地と50年ほど前から団地として開発された地区との間に、災害時の互助的行動で有意な差が認められた。安心・安全な地域づくり、あるいは今後増加すると考えられる高齢者のリロケーション場面において地域性を配慮して計画を策定することが必要であることの示唆と捉えられる。

(3) 高齢者居住施設における「もの環境」とその印象

(1)の結果では、転居のいわば「成功感」により作用すると考えられるのは、家具以外

の物品であるということが示唆された。ストレスのかかりやすい転居場面における「もの環境」の整え方を考察する。条件を整理して検討を行うためにも高齢者居住施設を考察対象とした。

①高齢者居住施設の居室内「もの環境」

高齢者居住施設は、平成14年に個室ユニットケアが制度化されるなど、居室の個室化が進められてきた。個室をそれぞれが持つようになると、個々に合わせたインテリアを整えることがより容易になる。Wilson & Mackenzie(2000)⁵によると、人はインテリアから住む人の社会性を読み取り、それには一定の合意が見られる。高齢者居住施設においても、インテリア、即ち個室内の「もの」の選択と配置はその人の社会性を示す重要な要素となるだろう。

Koga, Yokoyama et. al(2002)⁶は、施設居住者の居室内の所有物を、Csikszentmihalyi等(1981)⁷の言う日常生活で用いる「行為対象」と、見るための「観賞対象」の概念を援用して分析した⁸。この手法と結果を踏まえて本分析を行った。

本章では居室を訪れた人が目にする、居室内に表出している物品や家具が形成する状況を「もの環境」と呼ぶ。研究では第三者による部屋の印象評価と「もの」環境との関連の分析を通して「もの環境」を媒介とした居室環境の評価が可能であるか、考察を試みる。

②研究の方法

i) 「もの環境」の調査方法 居住施設Aの入居者18名の協力を得て室内全面を写真撮影し、表出している物品の状況を捉えた。撮影した全ての写真から写り込んでいる「もの」の内容と数を把握、「もの環境」として整理した。「もの環境」は「行為対象」と「観賞対象」に分け、分析する。今回、分析の比較対象に施設Bの調査データを用いた¹⁰。

ii) 印象評価実験の方法 居室環境の印象評価は、入居者本人に尋ねる方法もあり得るが、対象者が虚弱であったり認知症であったりする場合は、直接尋ねることがしにくい。そのため、今回は、一般学生に居室の光景を見せて評価させる方法をとることにした。なお、施設環境の光景の印象評価について、動画および静止画を見せて評価を比較したところ、両者の評価が同様の傾向を見せることが確認された⁹、¹⁰。よって、本論では静止画＝居室内写真を見せる手法をとった。撮影した写真のうち、その居室の特徴を最も良く表した1枚を選択し、評価実験用に1枚のシートに並べた居室写真の一覧表を作成し、被験者に提示した(表1)。評価実験では、被験者(学生92名)に、写真1枚ごとに表1に示す評価軸(表2)に基づいて、5段階評価をしてもらった。実験は、2010年10月～2011年1月にかけて実施した。

③結果と考察

i) A, B2施設の入居者を高低ADL群に分けた分析結果は、高齢者居住施設のある程度活動的な居住者の居室に表出された「もの量」がおおよそ90個内外程度であることを示唆していた。入居時に必要な物品を揃えていく時の一つの目安とすることができる。表3-1 高低ADL群別印象評価平均

評価項目	高ADL群	低ADL群	評価項目	高ADL群	低ADL群
楽しさ	2.48	2.60	明るさ	3.19	3.17
なじみ深さ	2.72	2.72	伝統性	2.80	2.73
ゆとりさ	2.98	3.28	広さ	2.99	3.27
清潔感	3.32	3.42	落ち着き	2.89	3.15
整理整頓	3.24	3.19	賑やかさ	2.74	2.89

ii) 施設Aで

は居室内の「もの」の数の大きな相違は認められないが、低ADLの人と高ADLの人の居室から第三者が得る印象が異なった。印象評価平均点と「もの環境」の関係から低ADL群の「もの環境」がスタッフ等によって楽しい雰囲気を目指して整えられていることが見て取れた。また、高ADL群では観賞対象の数及び総数と「伝統性」の評価の相関が高く、他項目では相関、相関傾向は認められない。生活面で必要な物品を自分で用意できる人の居室では、「もの」が多く揃えられたことが必ずしも第三者に好印象をもたらすものではない。(表3-1)

iii) 場所の印象評価は主に、清潔感、整理された印象など維持管理状態に対する評価で構成される部分と、馴染み深さや楽しさ、賑やかさなど親近感に関する評価で成り立つ部分から成立し、その他に伝統性があげられる。

v) 「もの環境」と印象評価には一定の関係がある。

f) 行為対象は維持管理状態に関する印象と密接に関係する。一方でなじみ深さとも関係する。j) 観賞対象は親近感に関わる印象の内、特にな

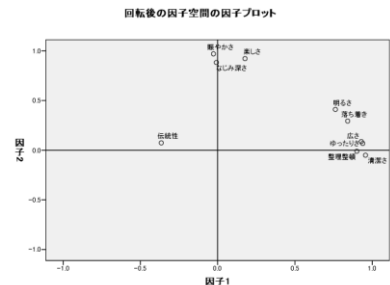


図 3-1 評価項目間の主因子分析の結果

g) 行為対象は維持管理状態に関する印象と密接に関係する。一方でなじみ深さとも関係する。j) 観賞対象は親近感に関わる印象の内、特にな

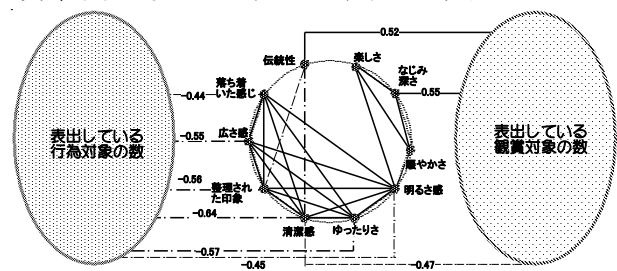


図 3-2 印象評価と表出している行為対象、観賞対象の数との関係

じみ深さの印象に関わることが示唆された。即ち、日用品、衣類などの行為対象の多い部屋は、清潔感、整理された印象などで低評価になりやすく、一方でなじみ深さを増す傾向にある。ウ) 観賞対象はなじみ深さと共に伝統的な印象にも関わる。(図 3-2)

iv) ア) 観賞対象は数が多いほど「なじみ深さ」の印象を高める可能性があり、居室に対する親近感を増す一助となる。イ) 行為対象の多さは環境の維持管理状態に対する評価と負の相関をとる傾向が強い。しかし、印象評価実験で用いた写真の行為対象の数と印象評価の相関を高低ADL群別で見ると低ADL群の結果で、「楽しさ」「賑やかさ」と行為対象の数の間に高い相関が認められること、「明るさ」との間に相関傾向が見られる。この結果は、ウ) 行為対象が何を選択するかによって場所への親近感や場所の維持管理状態に対する評価の内の「明るさ」の印象を高めることに寄与し得ることを示唆している。(4) 総括

転居経験に関する調査から、転居の成功感には、地域との関係の持ち方や、家具よりも、家具以外の「もの」の影響があることが示唆された。(2)の地域コミュニティに関する調査分析は、転居先の地域がもとより持っている特徴がその後の地域との関わりに影響を与える可能性を示している。これは、転居する人へのアドバイスとなりえるだけでなく、町づくり、地域環境整備において生かしていくべき視点を含む。さらに確かな知見を得るため、今後考察を重ねる予定である。また、新たな場所での環境形成の支援の方向性として、良い感じを与えるような環境作りのための方針を導き出せるかを試みたのが(3)である。本論では、高齢期のリロケーションの一つである高齢者居住施設への入居をとりあげ、入居後の居室における「もの」環境について評価を行い「もの」環境整備の支援のあり方について考察した。この結果は、日常使うものと、見て楽しむような対象がもたらす印象傾向が異なることを示し、虚弱高齢者の住まいづくりの支援などに対して具体的な方策の端緒となりえるものである。

参考文献

- 1) Nicholas G. Castle, (2001), Relocation of the Elderly, *Medical Care Research and Review*, 文 2) Abir K. Bekhet et al, (2009), Reasons for Reocation to Retirement Communities: A Qualitative Study, *Western Journal of Nursing Research*, 3) 大原一興他, (1992), 経費老人ホーム入所に至る要因と入所後の生活 高齢者の生活拠点移動に関する研究 I, 日本建築学会計画系論文報告集第 442 号 文 4) Tadashi Toyama, (1987), Identity and Milieu -A Study of Relocation Focusing on Reciprocal Changes in Elderly People and Their Environment, *Department for Building Function Analysis, The Royal Institute of Technology, Stockholm, Sweden*, 文 5) Margaret A. Wilson, Nicola E. Mackenzie 2000 Social Attributions Based on Domestic Interiors in *Journal of Environment Psychology* 20, 343-354 2000 文 6) KOGA Toshie, YOKOYAMA Yurika, Toyama Tadashi, Tkahashi Takashi & Tachibana Hiroshi in 2002 *Environment Quality of Private Rooms and Resident's Assessment of Nursing*

Homes The Proceedings of the 5th. International Symposium for Environment-Behavior Studies 621-631 2002

文 7) Csikszentmihalyi, Mihaly & Rochberg-Halton, Eugene. Meaning of the Things. Cambridge Univ. Press. 1981

文 8) KOGA, Toshie, YOKOYAMA, Yurika, LEE, Kyeong-Lark and LEE, Hyun-Hee. Impression Comparison of Dining Room at Elderly Residential Facilities in Korea and Japan. *Proceedings of the 20th IAPS Conference. 2008 (e-abstract)*

文 9) 古賀紀江, 横山ゆりか 環境評価実験の体験学習- 日韓の高齢者居住施設における食事場所を題材として. 第 9 回建築教育シンポジウム建築教育研究論文報告集 53-58 2009

文 10) 古賀紀江, 横山ゆりか 高齢者居住施設入居者の「もの」環境の経年変化に関する研究 ADLと認知症程度と「もの」の量 日本建築学会学術研究発表梗概集 2009 159-160 2009-07-20

謝辞

各調査で、協力をいただいた高齢者居住施設の方々、関係の方々には御礼申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

① 古賀紀江, 横山ゆりか, 李京洛 高齢者居住施設の「もの環境」とその印象 第三者による印象評価の可能性について、日本建築学会計画系論文集、査読有、第 27 巻、2012、pp.1817-1822

② 古賀紀江, 横山ゆりか 高齢期の転居の実際と環境評価 引越し経験アンケート調査の分析 日本建築学会大会学術講演梗概集、査読無、2012、pp.1231-1232

③ 古賀紀江 災害時の互助的行動に関する居住者評価の考察 - 前橋市内 2 地域におけるケーススタディー MERA Journal、査読無、27、2011、pp. 53

④ 古賀紀江, 横山ゆりか 高齢者居住施設の居室内の「もの」環境と印象評価、日本建築学会 大会学術講演梗概集、査読有、2011、pp.13-16

⑤ 横山ゆりか, 古賀紀江 特別養護老人ホームにおけるプレイス・アタッチメント - 地域居住環境との比較の試み MERA Journal、査読無、26、2010、pp.43

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古賀 紀江 (KOGA TOSHIE)

前橋工科大学・工学部・准教授

研究者番号：10295454

(2) 研究分担者

横山 ゆりか (YOKOYAMA YURIKA)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：20251324